

かたりと書ふみ

— 四鏡における語り手設定の丹精 —

\*木村紀子

## 一

○ 蓋シ聞ク、上古ノ世、未ダ文字有ラザルトキ、貴賤老少口口ニ相伝ヘ、前言往行存シテ忘レズ。書契アリテ以來、古ヲ談ルコトヲ好マズ。浮華競ヒ興リテ、選リテ旧老ヲ嗤フ。  
(古語拾遺 序)

○ たゞ世にとりて人の御耳とゞめさせ給ぬべかりしむかしの事ばかりを、かくかたり申だに、いとをこがましげに御覽じをこする人もおはずめり。  
(大鏡 卷六―世継のことば―)

文字は、どのような場合にも、それを自由に駆使できる層とそうでない層との言葉を、分断する危険をはらんでいる。上古、我々の言語は、みずからの文字を生むよりはやく、他言語の複雑に発達した文字の洗礼をうけた。それは、極度に完成した表意力をもつ単語文字だったために、真名まなと呼ばれ、それが担う「高度な」文化への同化願望から、民族のおのずからの「かたり」と「こころ」を封じながら、由来支配層のハレの言葉であり続けたのである。

けれども、みずからの言葉の微妙なニュアンスはそぎ落してしまいう真名表記、それをまたあらためて訓読する煩わしさへの漠たる疑問は、

遣唐使の停止、公における修史事業の中断等を経て、ようやく、真名に呪縛された層にも芽生えてきたと思われる。

○ 日本紀などは、たゞ片そぼぞかし。これらにこそ、道くしくくはしき事はあらめ。  
(源氏物語 螢)

という光源氏の言葉が、だからこそその層には衝撃だったはずで、ゆえに式部墮地獄伝説も生まれたのである。しかし、

○ 訓ノヨミナレド、心ヲサシツメテ字尺ニアラハシタル事ハ、猶心ノヒロガヌナリ。真名ノ文字ニハスグレヌコトバノ、ムゲニタゞ事ナルヤウナルコトバコソ、日本国ノコトバノ本体ナルベケレ。  
(愚管抄 卷七)

という正面からの言あげは、また、漢才に支えられた王朝盛時の男子知識層には不可能だった。

ひらがな文による平安中ごろの物語類の中で、かろうじてあるいは公然と筆者が知れるのは、源氏・栄華・狭衣など女の手になるものが主である。竹取・伊勢・宇津保そして大鏡など、おそらく男の手かと

推察されている作品の筆者が判明しないのは、単に物語の通性ゆえと  
は限らなかつただろう。つまり男子にとってひらがな文を草すること  
は、たわむれにせよ世をしのんだ、場合によっては世をすねた営みだ  
つたからで、「男もすなる日記といふものを女もしてみん」とは、そ  
の実「女もすなるひらかな文といふものを男もしてみん」としたのだ  
つた。おそらく、「心ヲサシツメテ字尺ニアラハス」真名文の苦渋を、  
徹底的に経験した者がそが、そうしたひらがな文の筆者だったにちが  
いない。

ところで、源氏物語の成立流布後の万寿二年で筆を収める大鏡が、  
源氏に言及する部分は一切ない。けれども、大鏡を継承した後の三鏡  
が、いずれも源氏に対してもあらわな継承意識を記しているところに  
は、それらの筆者たちの大鏡観が、源氏とのかわりごとくあらわれて  
いたことを推察させる。

源氏物語における「かたり」の担い手は、紫式部はもとより、いわ  
ゆる草子地に顔を出す人々にしても、すべて当時の宮廷女房たちであ  
る。それに対して大鏡筆者は、いわば「女もすなるひらかな昔もの」が  
たりを、男もしてみん」としたのだ。浮華を廃しもつとありのままら  
しく——。けれども、ただ昔のことをひらがな「かたり」文体で記せ  
ば、それは結局「女」のかたりになってしまう。男の目からのかたり  
なのだというためには、ぜひとも男の語り手を明示することが必要だ  
つた。

しかしながら、源氏物語の語り手が、筆者紫式部をそのまま映し出  
す女房層とみられるのと同等には、大鏡筆者はみずからを直接映す語  
り手となることができなかつた。もし、みずからの階層で語り手を具  
体化するなら、大鏡は、江談抄・中外抄・富家語といった作品の文体  
——漢文に間々かな書きが混じるといった——をとるしかなかつたの

である。しかもそれでは、大鏡筆者が書こうとした歴史的事実の背後  
にからまる人間心理のあやや、それらへの率直な批評は、高家の人  
にかかれれば、はばかりが多い。かといって、語り手に男の筆者みずか  
らを彷彿させながら、「児女子ガ口遊」(愚管抄)のひらがな「かたり」  
文体で、おぼめきながら記すなどという「をこがましい」ことが、ど  
うしてできるだろう。やむなく筆者は、みずからは語り筆録者の立場  
に甘んじた。そして、語り手は、真名に縁のない、書契以前の世界に  
そのまま生きる「下藪」の「おきな」たちに設定したのである。

○ 昔、さかしきみかどの御まつりごとの折は、「国のうちに年老いたるお  
きな・女やある」と召したつねて、いにしへのおきてのありさまを問はせ  
給てこそ、奏することをきこしめしあはせて、世のまつりごとは行はせ給  
けれ。されば、老いたるはいとかしきものに侍り。わかき人たち、なあ  
なづりそ。(大鏡 卷一)

大鏡の第一の語り手「高名の大宅世継」は、賢帝の政にも参画した  
という、昔の旧老たちの面影を、まずはおのれに重ねようとする。そ  
して、

○ 世継はいとおそろしきおきな侍。真実の心おはせむ人は、なかはづ  
かしと思さざらん。世の中をみしりう、かべたて、もちてはべるおきな也。  
たれも心をとなへてきこしめせ。世にある事をば、何事を見んのかし聞の  
こし侍らん。この世継が申す事共はしも、しり給はぬ人々、おほくおはす  
らんとなむ思ひはべる。(同)

と、みずからの「かたり」の真实性について、巫覡的な断言をもする。  
菩提講に参集していた僧俗は、また、「ひたひに手をあて、信をなし

つゝ、「すべてく申すべきにも待らず」と呟き入っている。筆者はそこに、「かたり」がそのまま「真言」として息づいている書契以前を幻想してみたのである。

けれども筆者は、あくまでふだん「かやうなる女・おきななんどの古言するは、いとうるさく聞かまうきやうにこそおぼゆる」(巻六) 真名信奉層に属していた。いかに由ありげな「旧老」のかたりとしても、それをただ筆録する体裁が、何ほどの信憑性も生まないことは知悉している。そこで筆者は、

○としごろ、昔の人に対面して、いかで世の中の見聞くことどもを聞えあはせむ、このたゞいまの入道殿下の御ありさまをも申しあはせばや。

(巻一)

と、偶然出会った高齡の同世代者の「語り合せ」形式をとることによって、まずはその信憑性を高めようとする。しかも、ともに「下腐なれどもみやこほとり」(巻一)という経歴をもち、宮中や高家の裏面に通じることもありうる性格づけをする。さらに、第三の人物として、とかく「そら物語する翁かな」(巻六)と輕蔑の目を向ける「わかき人々」の中から、「このしろしめしげなることどもは、思ふにふるき御日記などを御覽するらんかし」(巻六)と、世継を感嘆させる書にも通じた青侍をアドに立てて、真名信奉層の批判にもたえうる「かたり」であることを匂わせる。加えてそれは、「この御寺の三宝、今日の座の戒和尚に請ぜられ給仏・菩薩を證とし」(巻六)、多くの会衆の批判にもつねにひらかれた姿勢で語られていたのだった。

けれども大鏡筆者は、かたりの終局部において、世継に結局つぎのようにならざることを、御簾のうちにまで聞くらんとおそろしく。

○このしろしめしげなることどもは、思ふにふるき御日記などを御覽するらんかしと心にく。下腐はさばかりのぎへはいかでか侍らん。ただ見聞きたまへし事を心に思おきて、かくさかしがり申にこそあれ。まこと人にあひたてまつりては、おぼしとがめ給事も侍らんと、はづかしうをはしませば、老いの学問にもうけ給はりあかさまほしうこそ侍れ。(巻六)

ここでは、世継がはじめにみせた「世の中を見知りうかべたて、もちてはべるおきな」としての自信は、もう影をひそめ、才ある人——真名の書に通じた人こそ「まこと人」だとして恭順の体を示すのである。それは、「日本紀などはたゞ片そばぞかし」への応酬だったとみられないだろうか。世継は、

○やむごとなくも又くだりても、まぢかき御簾・すだれの内ばかりや、おほつかなさのこりて侍らん。それなりとも、各宮・殿原・次々の人の御あたり人にのうちきくばかりのことは、女房・わらは、べ申つたへぬやうやは侍る。されば、それも、不意につたへうけたまはらずしもさぶらはず。されど、それをば、なにとかはかたり申さんず。

(巻六)

と、女房・わらはへの「かたり」の領分には、あえて踏み入らなかつたとも言う。

大鏡の語り手設定の丹精は、かたりと真名の書とのかけはしを模索しながら、いかに女手によって男のかたりのリアリティを出すか、というところにあつたのである。

## 二

○いかでかくよろづのこと、御簾のうちにまで聞くらんとおそろしく。

## (大鏡 卷六)

大鏡の、冒頭で語り手と語り空間とを設定する手法は継承しながらも、後の三鏡はいずれも、その語り手あるいは直接の聞き手に、はっきり女子をたてた。それは、それら鏡物が志向した語りの内容や形式に照らせば、女子をかかわらせるほうが結局は自然だったということだろう。

今鏡の語り手の老女は、みずからの素性を、祖父の名は世継、父は学生、自分は紫式部の局にあやめという名で仕えたと、大鏡・源氏物語双方に、いささか欲ばった継承意識をもって紹介している。しかしそこには、右に述べた大鏡の語り手設定意図が十分に察せられていたことが如夷でもある。さらに今鏡は、(下臈の身で)「いかでかくよろづのこと御簾の内まで聞くらん」と大鏡の筆録者もらした疑問に對しても、老女の子に、「内わたりの事も語り、世の事も暗からず申し」た五節の命婦、「朝浄め御垣の内仕うまつる」殿守のみやつことを配し、周到な構えをみせる。

その上で、今鏡が試みたのは、一つには、いわば政治史でなく文化史を軸に語ることに、今一つは、書に拠るかたりとそうでないものとを明確に区別することだった。

時代は、大鏡のころとは異なり、公家階級が、政治のダイナミズムを誇らかに語れる現実を喪失しつつあった。

○ 保元ノ乱イデキテノコトモ、マタ世継ガ、モノガタリト申モノモカキツギタル人ナシ。少々アリトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ。ソレハミナタヤ、ヨキ事ヲノミシルサントテ侍レバ、保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテノミアランズルヨハバカリテ、人モ申ヨカ

## ヌニヤトロロカニ覺テ：

## (愚管抄 卷三)

とかく世相は文にめでたくはないことばかりで、「世継物語」が志向したそのあたりの意識を、今鏡等は見えていないと言いつても、さすがに愚管抄はよく見とおしている。今鏡の筆者は、おそらくみずからの遁世の志どおり、意識的に政治的世界を捨て、代わって能芸にめで語るべき対象を傾斜させた。だが、もし語り手を女とするなら、それは、しごく自然な志向領域ということになるではないか——。

けれども今鏡は、そのように周到に仮構したはずの語り手に対し、「かたり口」を仮構する段になって難渋した。筆者が歴史的対象の証とするものは、真名にせよ仮名にせよ先行の書であり(源氏・榮華・大鏡等の出現により、ようやく仮名文も書としての地位を得つつあったことがわかる)、彼の関心ももっぱらその書にあったから、しばしば資料としての書を律義に明示しないでは気がすまないのである。

○ 和歌詠むべきやう、連歌など侍る文には、道信中将の歌、伊勢大輔が「こはえもいはぬ花の色かな」と付けたる事など、いと優なることにこそと侍るなれ……家の集には、聞きと聞き給へりける事と覚ゆる事詠み集められ侍り。これは連歌のついでに、承りしことを申し侍るになむ。

(すべらぎの中 第二)

○ その御あり様、内侍の典侍讃岐とか聞えし、細かに書かれたる書侍りとかや。人の読まれしを、ひとかへりは聞き侍りし。

(同)

○ 橘の氏の贈中納言止相と聞え給ふ宰相の日記にぞ、この事は書かれたるに聞き侍りし。

(昔語 第九)

その上で、ああこれは下臈の老女の聞語りだったのだというわけだ——と聞き侍りし」などにつけ加えるのであるが、それも、筆者の

書への関心がとりわけ色濃く出る「昔語」の部分などでは、どうにも間に合わなくなってしまう。

○ 義忠の三位、女房につけて奉りける「青柳の色の糸にて結びてしうれ葉は解けて春ぞ暮れぬる」とぞ聞き侍りし。「よれ葉ほどけで」と書るもあり。何れか真に侍らむ。

(昔語 第九)

○ 請け文は、三河の聖賢奉りて、秀句など書き留め給ふなり。「……とぞ書かれ侍りける。」

(同)

今鏡の筆者は、みずから信奉する書の世界を「かたり」に昇華はしきれず、結果として語り手設定を著しく形骸化した。そして、すべて老女の打聞による口がたりの筆録であるはずのものの中に、何とも奇妙に「打聞」という部立てをとりつけて巻末に添えさせたのである。「打聞」の中に収められているのは、「敷島の打聞」という数篇の歌物語、「奈良の御代」という万葉集成立論、「作り物語のゆくへ」という源氏物語論である。そのうち、いわば全巻の結びともいえる「作り物語のゆくへ」では、紫式部墮地獄説に反論して、

○ 仏も譬喩経などいひて、なき事を作り出し給ひて説き置き給へるは、こと虚妄ならずこそは侍れ。女の御身にてさばかりの事を作り給へるは、たゞ人にはおはせぬやうもや侍らむ。妙音観音など申すやむごとなき聖たち女になり給ひて、法を説きてこそ人を導き給ふなれ。(打聞 第十)

などと、老女あやめの口を通して、源氏物語擁護の熱弁がふるわれている。それはそのまま、式部ゆかりの老女を「虚妄の」語り手にたてて今鏡を書いた自身の弁解もこめた筆者の持論だったのだろう。そして、同様に、聞き手との問答形式で展開されている万葉集成立論も、

当時の諸説に対する筆者自身の見解だったとみてよいと思われる。とすれば、同じ部立て中の「敷島の打聞」も、単に伝聞による歌物語と異なるところなく、筆者自身の解釈や語り口がかなり濃い歌物語だと考えられるのではないだろうか。それらが、今昔物語集・袋草子など今鏡成立以前のものに載る類話と、語り口を共有する部分はほとんどないのである。

今鏡は、先行の書にもとづいて極力客観的に記した第九までに対し、第十を、筆者の主観的見解をつよく打出したかたりとして別扱いし、しかも書の実証のない妄語とのそしりを避けて、あえて単なる「打聞」であることを強調したとみられる。おそらく、そうしなければならなかったほど、今鏡筆者の周辺は、書の呪縛からまだ自由ではありえなかったのである。

### 三

○ 万寿のころをひ、世継と申しさかしきおきな侍き。文徳天皇より後つ方の事は暗からず申をきたるよしうけ給はる。そのさきはいと聞耳遠ければとて申ざりけれども、世の中をきはめしらぬは、かたおもむきに今の世をそしる心出で来るも、かつは罪にも侍らん。目の前の事を昔に似ずとは、世をしらぬ人の中ごとなるべし。かの嘉承三年よりさきのことをおろく申べし。(水鏡 上)

「むかし物語」するとは、大鏡・今鏡にみる限り、みずから生きていた実感のある過去の、「たゞ見聞きたまへし事を心に思おきて」語ることである。ために、大鏡・今鏡は、いずれも語られる年代に即して法外な高齢の語り手を設定した。そうした「むかし物語」の文脈に則りながら、世継さえ「聞耳遠ければ」として語らなかつた文徳天皇

以前のことを、はるか降つた今語るとすれば、いったいどのような語り手なら可能だろうか——水鏡(5)の語り手設定の苦心は、そこから始まる。

ところで、水鏡が、大鏡・今鏡と異なる点は、語り手よりもまず聞き手にある。それは、今年七十三になる尼というように、かなり具体的に性格が示され、大鏡や今鏡のような僧俗男女いずれともつかない漠然としたあり方(6)はとらない。その上で、その尼に、「此事をけちてやまむ、くちをしくて書付け侍也」と、筆録者としての立場を明確にしてもいる。つまり、水鏡は、最終的には尼がその打聞を記したものであるということになり、女手「かたり」文体に対し、それなりに自然な担い手が設定されたわけである。

さて、肝賢の第一の語り手については、「この申ことは見き、しことはばかり」と、あくまで、生きてきた時代の見聞を語る原則をくずしていない。ただしそれが、神武天皇以来となれば、大宅世継の神秘性でもう間に合わず、十日の月の入方の幽暗の山中から登場する「やせ神さびたる」葛城の仙人、ということになった。そうした何とも超現実的な仙人の語り、現実の今の尼にとりもつのが、第二の語り手の修行者である。修行者である以上彼が、あるときは大峯葛城などを修行し歩いて仙人にめぐり会い、今また泊瀬に籠つて尼と出会うことに何の不都合もないだろう。

水鏡は、資料も乏しく、すこぶる「聞耳遠き」時代を語るために、大鏡の語り合せによるまことへの接近手法とはむしろ逆に、聞き語りを二度重ねるといふ腫化手法をとった。その上で、修行者から尼へという語り継ぎによって、男の語りや女手「かたり」文体で記す大鏡の意図は全うに継承した。水鏡の語り手設定は、今鏡よりよほど成功しているといえないだろうか。しかもその語り手は、三者それぞれに、

○ この申ことは、見きしことばかりなれば、大切なことども多く落ち侍ぬらん。これはたゞおほやうのありさまを思し合せさせむと思給るばかり也。(仙人)

○ いまかくかたり申も、なを仙人の申しごと十が一をぞ申らん。その中になをひがごと多く、世の人みな知り、おこがましき事どもにてこそ侍らめ。(修行者)

○ 世あがり才かしかりし人の、大鏡などいひて書きをきたるには似で、ことばいやくひがごと多くして、見どころなく、文字落ちりて、見ん人にそしりあざむかれんことうたがひなかるべし。(尼)

などと述懐し、世継やあやめのような自信満々な風はとらない。それは、水鏡が、ほとんど扶桑略記だけに拠つて書いたからということもあるかもしれないが、かりに、あたう限り多くの書を駆使して書いたとしても、同じようなことは言われただろう。

竹肉相食む社会の争乱、末世到来の声の高まりの中で、水鏡の著述意図は、

○ ひとへに目の前の事ばかりをのみそしる心おはして、いにしへはかくしもなかりけんなど思す、ひとすぢなる心のおはするかたを申きかせば、一分の執心をも失ひたてまつりなば、仏道にすゝみ給かたともなかならざらん。(上)

○ いづこもく心うきは人の心なり。(同)

といったところがあり、最終的なたてまえとしては、

○ 人のためとも思侍らず……われ一人見んとて書付け侍ぬ。(下)

というのだった。それは、大鏡や今鏡の語り手の言い草よりも、むしろ

る恩管抄の、

○ ヒトスデニ世ノウツリカハリオトロヘクダケルコトハリ、ヒトスデヲ申サバヤトオモヒテ思ヒツマクレバ……コレヲ思ツマクル心ヲモヤスメント思テ、カキツケ侍也。  
(卷三)

というのに近い。水鏡筆者は、すでに、冷徹な内省の目をもった中世公家だったのである。そして、いかに「ひがごと」にならぬようにと心して書きとめたとしても、言葉とは、一つの事実に対して、一個人の目を通した一面を語るにすぎないということを、人々はようやく自覚しつつあった。

水鏡にかたりと書との葛藤はみられない。「世の人の口」さがなさは常のこと、「われ一人見ん」ということならば、「若くよりかやうのことの心にしみならひて」というままの「むかし物語」の文体で、自由に語り記すことこそが、その目的だったのである。

#### 四

○ 世に語り伝ふる事、まことはあいなきにや、おほくは皆虚言なり。あるにも過て人は物をいひなすに、まして年月すぎ、境も隔りぬれば、いひたきまゝに語なして、筆にも書とさめぬれば、やがて定まりぬ。……音に聞くと見る時とは、何事もかはるものなり。……とにもかくにも虚言多き世なり。たゞ常にある珍らしからぬ事のまゝに心得たらん、よろづ違ふべからず。下さまの人の物語は耳おどろく事のみあり。よき人はあやしき事を語らず。  
(徒然草 七十三段)

口がたりばかりではない、書にとどめられているところで、それがまことである保証などどこにあるだろう。自己にとつて、まき目に見

ること以外の何が、確実に在ると信じられるというのだろうか——。激しい動乱の時代の価値観の動揺の中、言葉の力に対する深い懷疑が人々を傾して後、増鏡は執筆された。

増鏡の語りの場は、語り手一人聞き手一人によって一見単純に構成されている。聞き手は、「さらば、いまの給はん事をもまた書きしるして、かの昔の面影にひとしからんとこそはおぼすめれ。」と、筆録者であることは明言するが、それ以外の性格は、大鏡・今鏡と同様曖昧である。他方語り手は、聞き手に「八十にもや余りぬらん」と見え、みずからは「百とせにもこよなく余り侍ぬらん」という老尼という以外、これもまたその性格を具体的には明かさない。ただし、「若き女房のつきん、しきほどなる」を具しており、「こよひはこの届にうち体みなん。坊へ行きてみあかしの事などいへ。」と指図する言葉つき、「なにとなくなまめかし、心あらんかし」「古代にみやびかに」「いと古代なり」と聞き手がしきりにもらす印象、口をついて歌が出、ふだんの言葉さえ「あはれにも(山の端近く)傾きぬめる日かげかな我身の上の心ちこそすれ」と歌めいているなど、由ある人の風情が濃厚である。

増鏡は、「第五 内野の雪」「第六 おりるる雲」で数か所、弁内侍日記に拠って書いたとみられ、また、第八から第十一までのうち後深草院にかかわる記事は、ほとんど同院女房二条の「とはずがたり」に拠っている。それら女房の手記は、相当の教養と冷静な記録意識をもった筆者によって、後深草帝・院にそれぞれもつとも近侍した位置にあつて書かれたとみられるものである。そうした作品をいわば一級資料とすることで、増鏡は、鎌倉期公家社会の「夕日、花やかさ」を、ひたすら帝・院・后妃・大臣など高位の人々に即し、そこに近侍する上位の女房の「御簾の内」からの視点で語ろうとしたとみられる。

徒然草には、玄輝門院の「閑院殿の櫛形の穴」についての有職の人も及ばない古い記憶（三十三段）、「別殿の行幸には昼御座の御剣にてこそありけれ」としのびやかに正す古き典侍（百七十八段）、「浄土寺前閑白殿は、幼くて安喜門院のよく教へ参らせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞ。」（百七段）などと、しきりに古き「よき人」の語りごとが讃嘆される。あるいはまた、『昭君門院御産愚記（公衡公記）』には、御産時の女房の装束につき、「内々尋申東二条院」といった記述もみられる。それらは、有職故実の重んじられた当時の公家社会において、日々禁省の御簾の内にある女院・上臈女房・内侍といった婦人たちの語りごとの権威と信頼性を伝えるものだろう。増鏡の「なにとなくなまめかしく、心あらんかし」という老尼は、さまざまの語り伝えがいろいろ乱れ、ともすればどれも虚言・僻言と軽んじられる風潮の中、かろうじてその言に信頼を得ていたそれら「よき人」の面影を宿していると思われる。あるいはそこに、そうした階層にあって必ずしも志を得なかつた『とはすがたり』筆者の晩年のイメージをみることも、それなりに可能だろう。

ただししかし、増鏡は、その語り口において、『弁内侍日記』や『とはすがたり』あるいは『竹むきが記』といった当時の女房の手記にみられる、いわば「すくよかな」文体を、そのままには踏襲しなかつた。たとえば、『とはすがたり』によって書いた「第十一 さしぐし」における後深草院と異母妹前斎宮との密会の記事をみれば、『とはすがたり』の院や前斎宮への率直な評言などは採らず、ひたすらめでたくおぼめいた王朝盛時物語風に改竄していることがわかる。

増鏡の語り手は、今鏡以後の三鏡の中で、はじめて栄華物語への継承意識をも口にするが、老尼の風情に対する「古代にみやびかに」

「いと古代なり」という強調は、栄華・源氏風のいわば「アナクロニズム的な」「擬古文」で語ることの前提として、それらを語った王朝盛時の女房たちの「昔の面影」をも重ねようとしたのだとみてよいだろう。

素性を具体的に明かさず、一見他の三鏡の語り手のような神秘性もない増鏡の語り手は、そのように古と今に通う宮廷女房のなれの果ての老尼といった風情で、四鏡の中でも最も象徴的に設定されている。こうして、鏡物の語り手は、「むげにいやしき」下臈の翁（大鏡）から、下臈ながら父は学生という老女（今鏡）に、語りの筆録ができる老尼（水鏡）に、そして「古代にみやびかな」老尼（増鏡）にと、しだいにその階級を高めて、最もその文体に即した本来の語り手に行きついたわけである。

そして、もし増鏡をアナクロニズムというなら、燭管抄などのカナ書き史書の出現の後にあって、語り手仮構による世継風「むかし物語」をすること自体が、しよせんアナクロニズムであつただろう。人々の心理の變に分け入れる和語で、自由に歴史を書きたいという衝迫、それが「見女子ガ口遊」だということにこだわらねばならないといった状況は、すでに遠い昔がたりであつたはずである。しかしながら、

○ をろかなる心や見えん増鏡ふるき姿にたちはおよばで

（序）

と老尼に歌わせた増鏡筆者は、それを十分承知していたと思われる。その上で、では何が、表現への衝迫となつたのだろうか。

○ 夕日の花やかにさし入たるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日かげかな。我身の上の心、こそすれ」とて、よりあるたる気色、

なにとなくなまめかしく、心あらんかし……

(序)

老尼の「我身の上」とは、和歌的情趣に色どられた王朝御簾の内社会、あるいは「古代にみやびかな」女語りということだろう。それが「あはれにも」今まさに「傾きぬめる」のである。ならばこそ、狂言綺語のかぎりをつくして、その「夕日の花やかさ」を描きとどめておきたい——。というのではなかったらどうか。

増鏡の記事範囲は、さまざまの行幸・御幸や御遊、吉凶の儀式、后妃の入内や御産等のゆゆしきはなやかさの描写が中心で、後世の目から重視される歴史的対象への言及に乏しく、ゆえにともすれば歴史意識の欠如を批判されたりもする。しかし、それは、筆者自身の現実に対するなまの関心のありようだったというより、「古代にみやびかな」女語りをする上の、仮構の関心(記事選択)だった。そして、後世からならともかく、みずから立つ時点において、一つの価値の「傾きぬめる」というたしかな歴史認識を、当時の知識層の覚めた部分(徒然草筆者などを含め)は、もっていたとみられるだろう。

筆者は、同じ「とはすがたり」を資料にするにしても、たとえば北山准后九十御賀(第十 老のなみ)では、「この御賀の事ども書きつけしるす人のみこそ多かめれば、かたはしだにいとかたくなならんとあさまし」と語り手に弁解させつつ「とはすがたり」にかなり忠実な事実描写に終始し、いったん他に「書きつけしるす人」もないとみるや、さきにふれた「さしぐし」における院と異母妹前斎宮との密会の記事のように、つくり物語風に改竄もする。また、後鳥羽・後醍醐の前後二度にわたる隠岐配流を描く部分は、つとに名文の評価が高いが、一方で「詠草を除けば何も残らない」といった史学的見地からの評もあり、おそらく詠草のみを資料にして(他資料の乏しいことを見こし

て)、筆者自身の歌物語的手法で語った可能性が大きい。

○ 御門は、和田の御さき、刈藻川をうち渡して、須磨の関にかゝらせたまふ。かの行平の中納言、「関吹こゆる」といひけんは、浦よりおちなるべし。あはれに御覧じわたさる。源氏の大將の、「泣く音にまがふ」とのたまひけん浦波、いまもげに御袖にかゝる心ちするも、さまざま御涙のよほし也。……大倉と云所すこし過ぐる程にぞ、人丸の塚はありける。明石の浦を過ぎさせ給に、「島がくれ行舟」ども、ほのかに見えてあはれ也。水の泡のありてうき世をわたる身にうらやまじきは海士の釣舟

野中の清水・ふたみの浦・高砂の松など、名ある所々御覧じわたさるゝも、かゝらぬ御幸ならば、をかしうもありぬべけれど、よろづかきくらす御乱り心ちに、御目とまらぬも、我ながらいたう屈じけるかなとおぼさる。

(第十六 久米のさら山)

たとえばこの歌枕づくしのような部分など、満腔の悲憤をこめて配所へ赴く帝への痛恨というよりは、どこか、いわば「罪なくて配所の月を」語らんとした趣がつよいと見えないだろうか。増鏡がとりわけ筆の牙えをみせるのは、人皆記録魔的な当時の公家社会の中、かろうじて他の書の制約から解放された事ながら、風景と人物との間でかなり大胆に情緒仮構をしながらかたるときのように見うけられる。

しかしながら、増鏡は、その序破急構成の急のあたり、おそらく筆者自身の生の実感をもまえた時代に入ることによって、ともすればみずからじかにかたる意識を露呈し、語り口仮構に破綻をみせることがある。たとえば、「かくいふは元弘元年八月廿四日也。」(第十五 むら時雨)という元弘の変勃発前後の、東行西行して風雲急を告げる筆致は、どうみても「みやびかな」女語りではなく、動的で緊迫した男のいくさ語り風である。(18)

語り手の老尼は、おりおり、

○ げに、いま見ゆべき事なれど、物の心もとなき事は、さおほゆるわざぞかしと、例の口すげみてほゝあむ。(三神山)

○ かゝるにしも、実雄の大臣の御宿世あらはれて、かたつ方には心おちる給も、世の習ひなれば、ことほりなるべし。(あすか川)

○ 天下の人、又をし返し、一かたになびきたる程も、さも目の前に移ろひかはる世の中かなと、あぢきなし。(さしぐし)

と、世の盛衰、人心の移ろいに、諦観的な感想をもちます。そして、「来し方ゆくさき、ためしもありがたかりし世の騒ぎにも、この御寺ばかりはつゝがなくおはします。」という常任の嵯峨清凉寺に設定された語り空間で、いささか高踏的に「口すげみてほゝあむ」ながらその移ろいを語った。

その覚めた筆者が、語り口で馬脚をあらわすほど、おそらくもしやという心おどりもあつた元弘・建武の政変——だが、それも結局、一旦たちまちに移ろい潤む「月草の花」にすぎなかつた。やはり、もう王朝公家社会の花やかさが蘇ることはあるまい。そして、その花やかさそのものをかたりつづけてきた「むかし物語」も円寂するだろう。みづからのこの筆とともに——。

○ 「釈迦牟尼仏」とたびく申て、夕日の花やかにさし入たるをうち見やりて、「あはれにも山の端近く傾きぬめる日かげかな。我身の上の心ちこそすれ。」

という「古代にみやびかな」老尼を、そのように見とおして増鏡は、

語り手にたてたのである。

増鏡の予見どおり、鏡物は以後書きつがれることはなかつた。けれども、その語り空間設定の手法は「かたり」に文字の代わりに身体と曲節を伴うことによつて、能楽の舞台空間に再現される。いわゆる夢幻能のワキ——旅の僧や山伏等は、鏡物の聞き手、語り手でありながらいつしか語り中の人物に変身して謡い舞うシテは、四鏡の語り手からさまざまに暗示をうけて象形されたとみられるだろう。

そして、観阿弥・世阿弥ら能の作者たちもまた、本稿の視点からすれば、「かたり」と「書」との架橋を激しく模索した人々だといふことができる。なぜなら彼らは、増鏡筆者のようなおそるべき書への知識をもつた公家や僧と、場合によつては目に一丁字なき荒くれ武者とを、一様に見所において演じ楽しませねばならなかつたからである。能楽の詞章や形式は、おそらくその制約から無縁に成立してはいない。そして、そこにおけるかけはし創造の営みは、大鏡筆者等よりも格段にきびしい、なかば命がけのわざであつたはずである。

#### 注

- (1) 松村博司『歴史物語改訂版』(寫書房) 117頁には、「漢詩文だけが本格的な文学とされていた平安時代にあつては、仮名の物語を書くことは作者にとつて特に名譽になることでもなかつたのであろうから」などある。

- (2) 松本新八郎『歴史物語と史論』(岩波講座「日本文学史」第六卷中世) には、視点がすこし異なるが、「大鏡」は男が書いたということだけが問題なのではなくて、「栄華物語」が描いた女性の世界を、男性の世界に読みかえたところに大きな意味がある。」とある。

- (3) 今鏡「打聞第十」に江談抄のことを、「藏人実兼と聞えし人の、匡房の中納言の物語、書ける書に」といういい方をしている。
- (4) 類話については、日本古典全書「今鏡」頭注参照。無名抄・十訓抄など、今鏡以後のものとは、語り口に通じる部分が出てくる。
- (5) 流布本系本文による。
- (6) 関手(筆録者)を、女と推す見方もある(阿倍秋生「歴史物語(四巻)」が、鏡物の語り空間設定(舞台構成)の手法を濃厚に継承した後の能楽は、それ(ワキ)を、旅の僧や山伏等男に見立てている。
- (7) 平田俊春「水鏡の成立と扶桑略記」(日本文学研究資料叢書「歴史物語」所収)
- (8) 拙稿「塵袋の中世——言語意識をめぐって——」(国語国文第五十卷八号)十七巻本を基準に扱う。
- (9) 資料については、日本古典文学大系「増鏡」頭注参照。
- (10) 松本新八郎「歴史物語と史論」には、「叙情的な韻律をもった調子の高い文体で、亡びるものの美しさを描いた。」などがある。
- (12) 視点が上層公家(上層女房)的であるからといって、(十七巻本の)筆者自身が上層公家であるかどうか単純にはいえない。新古今時代を経た当時の虚構へのたくみは、あなどれないものがある。
- (13) 高橋田鶴子「増鏡序——老尼についての一考察——」(史海13号)
- (14) 拙稿「中世の女房詞——「とはずがたり」の言語位相——」(叙説附54・10)
- (15) 岡一男「増鏡」(日本古典全書)解説。
- (16) 四鏡は、また、政治的事象を中心に批判的にかたる男の意識を貫いた大鏡・水鏡と、文化的事象を中心に共感的にかたる女の意識を仮構した今鏡・増鏡とに二分してみることもできる。
- (17) 上横手雅敏「増鏡の立場」(国史大系月報22)における「新島守」評。
- (18) 山下宏明「増鏡の世界」(名古屋大学文学部研究論集23)には、この部分にかかわって、「『増鏡』は軍記物語の世界にも近いものを見せている。」などがある。

## On the fictional narrators in Ookagami, Imakagami, Mizukagami and Masukagami

Noriko KIMURA

### Summary

Why and how did the authors of *Kagamimono* (four historical tales in the 11th—14th century) create their fictional narrators respectively?

Behind each of them there were troubles of the intellectuals who earnestly groped for a bridge between the narrating and the writing.